

日本語の挨拶表現とポライトネス

——「こんにちは」について——

牧原 功（群馬大学）

要 旨

本稿は日本語の挨拶表現である「こんにちは」の使用制約について考察し、それがポライトネスストラテジーとして機能していること、状況によってポジティブポライトネスストラテジーとして機能するため、それによって使用制約が生じていることを主張する。あわせて、会社や学校等での挨拶として、発話される時間に関わらず「おはようございます」が好んで使用されるという現象も、その語用論的性質の影響を受けて広まっているものである可能性を示す。
キーワード: 挨拶表現、ポライトネス、ポジティブポライトネスストラテジー、こんにちは

1. 問題の所在、研究の背景

筆者は大学で留学生の日本語のクラスを担当しているが、留学生から送られてくるメールに「こんにちは」という表現がかなり高い頻度で使われている。これは近年の傾向という訳ではなく、体感的には20年前から同様であったと思われる。昨今では、同僚から、日本人学生からのメールにも「先生、こんにちは」が使われることがあると耳にすることもあり、使用される環境は広がっている可能性があるが、いずれにせよ、これら学生から教員宛てのメールに「こんにちは」を使うということには違和感を覚える。

私が担当する留学生対象の作文の授業では、初回の課題をメールに添付して送付させることが多いが、これは、課題を送るメールの中で「こんにちは」を使う学生への注意喚起のために行っている。以下に、留学生からのメールの実際の文例を示す。

(1)

先生、こんにちは。私は〇〇です。いつもとても参考になる授業ありがとうございます。メールに自分が書いた作文を添付いたしました。先生の時間があるときに、目を通してください。非常にありがとうございます。以上、よろしく願いいたします。

この現象について、筆者は2014年の日本語用論学会の大会での発表において言及し、日本語の「こんにちは」は、ポジティブポライトネスストラテジーとして機能しており、その点を理解しないまま使用することが原因ではないかと述べたが、「こんにちは」をポジティブポライトネスストラテジーとみなしてよいかどうかという点については懐疑的な意見も多かった。

その後、牧原（2106）において、上記発表の内容を論考にまとめる等したが、この問題については改めて検討する機会はなかった。そのような中で、ここ数年、日本語学習者の挨拶表現の使用についての研究が散見されるようになってきており、書き言葉以外にも日本語の挨拶表現の特徴が学習者を悩ませていることを再確認し、「こんにちは」を含めた、日本語の挨拶表現の用法・使用制約を理論的に確認する必要性を感じ、本研究を行うこととした。

なお、本研究では、会話における「こんにちは」の運用上の特徴を、他の言語と比較しつつ検討し、挨拶表現のポライトネスストラテジーとしての機能について考察する。そして、日本語学習者がメール文に多用する「こんにちは」の不適切性の高さと、会話における「こんにちは」の特徴との関連性を検討することとする。

2. 先行研究

まず、日本語の「こんにちは」の用法に関わる先行研究について、近年発表された山内(2017)と丁(2017)を取り上げ概観する。

2.1. 山内智恵美(2017)「“你好”は「こんにちは」なのか～日中挨拶言葉の比較と分析

山内(2017)は、中国語における“你好”に焦点を当て、その特徴を日本語の「こんにちは」と対比させることで明示しようとした論考である。その中で山内は以下のように述べている。

中国社会をよく観察してみると、中国では、日本語「こんにちは」が使われるほど、“你好”は使われる頻度は高くない。ある意味“你好”はビジネス用語と言える。(中略)従って、“你好”は初対面のあまり親しくない相手、ビジネスのようなかしまった場面で使うことはあるが、友人同志では、名前を呼び合う、或いは目線を合わせるだけで、挨拶の代わりになる。友人には“你好”というフレーズは使わないし、家族間では、当然使わない。比較してみると、如何なる場面や相手にも「こんにちは」の一語を発すれば済む日本人に比べて、中国人の挨拶はある意味大変複雑である、と言える。⁽¹⁾

この論文において、山内は日本語の「こんにちは」は非常に汎用性が高いものであるが、中国の“你好”は場面によって使い分けられるもので、日本語ほど汎用性は高くないと述べている。しかし、実際には日本語の「こんにちは」もそれほど汎用性が高いものではないと考えられ、さらなる考察が必要と思われる。

2.2. 丁尚虎(2017)「大学生におけるあいさつ使用の日中対照—出会いの場面を中心に—」

丁(2017)は、大学生が日常会話の挨拶としてどのような表現を用いるかについて考察した。丁は、日本人学生はあまり親しくない教員には挨拶をしないが中国人学生は誰に対しても積極的に挨拶を行うこと、日本人学生は時間帯に関わらず「おはよう」を使う傾向があるが、中国人学生は「早」をほとんど使わず「好」を使うことなどを明らかにした。

また、丁は、中国人上級日本語学習者40名を対象に、日本語の挨拶表現の使用を調査し、その際、調査対象者への聞き取り調査によって、使用上の困難点として以下の回答を得た。

- ①「おはよう(～)」と「こんにちは」に関する使い分けが困難である(16例)
- ②出会いの場面においてよく知らない人にどのようにあいさつすべきかわからない(9例)
- ③上位者にあいさつをする際に、敬語表現の使用を忘れやすい(4例)

このうち、②の点から、日本語学習者も「こんにちは」が汎用性の低い挨拶表現である

ことは理解しているが、実際にどのような挨拶を行うべきか理解できていないことが見て取れる。

3. 会話における「こんにちは」の使用制約

本稿の出発点は書き言葉における「こんにちは」の用法を検討することであったが、関連する先行研究が日常会話での「こんにちは」に焦点を当てていること、また、日常会話の使用においても様々な使用制約が見られることから、最初に会話における「こんにちは」について検討することとする。

3.1. 「こんにちは」の使用制約①

まず、初対面の場での挨拶（学会の懇親会や、パーティなど、ややフォーマルな場を想定）について考えてみたい。

(2) 初めまして、〇〇と申します。

(3) あの～、〇〇と申します。

(4) ??こんにちは。〇〇と申します。

上記のように、懇親会などの席で初対面の相手に話しかける際に「こんにちは」を選択することはあまりなく、母語話者は無意識に避けている表現であるように思われる。

未知の相手と「こんにちは」を用いて会話を開始することは稀であるとすれば、「こんにちは」は話者・聴者が相互に一定程度に相手を知っていることを前提として使用されるものと考えられる。例えば、近所の顔見知りの人との挨拶、大学の中で学生が教員に対しておこなう挨拶で用いられる「こんにちは」なども同様の性格のものとして位置づけることができそうである。そして、セールス、営業やキャッチなどで相手との距離を意識的に詰めたという場合は、初対面でも敢えて意図的に「こんにちは」を使う場合は多い。合コンなどでも使用されそうだが、動機は、初対面の相手であっても知己であるように話しかけるといふところにあり、相手との距離を意識的に詰めるという機能によっていると考えるのが妥当であろう。このような使用制約は、「こんにちは」のポジティブポライトネスストラテジーとしての側面が影響していると考えられる。

3.2. 「こんにちは」の使用制約②

3.1節では、初対面の相手には使いにくいことを述べたが、「こんにちは」は、逆に、とても親しい相手には使いにくいという性質も有するようである。例えば私が親しい共同研究者と会った際に、どのような挨拶行動を取りうるかを考えてみる。

(5) 〇〇さん、ご無沙汰してます。

(6) 〇〇さん、お久しぶりです。

(7) 〇〇さん、データベースの入力、なかなか進まなくてすみません。

(8) ??〇〇さん、こんにちは。

一方で学会や研究会で顔を合わせるというような関係の相手に挨拶を行う場面を想像すると、以下のすべての挨拶が可能であるように思われる。

(9) △△さん、ご無沙汰してます。

(10) △△さん、お久しぶりです。

(11) △△さん、お元気でしたか？

(12) △△さん、こんにちは。お元気でしたか？

これらの現象から、話者と聴者の心的な距離が一定程度以上に近接していると「こんにちは」は使用不可である、という使用制約が導ける。家族間で「こんにちは」を使用することは常識的にはあまり想定できない。また、体育会系の部活動を行っている高校生が同じ部の同級生に「こんにちは」を用いるというようなことも想定しにくい。話者と聴者の心的な距離が一定程度以上に近接している状況で「こんにちは」を用いると、非常に他人行儀で、無理に距離を取ろうとしているような感覚があるように思う。

以上から、一定程度以上に近接した関係で「こんにちは」を使用すると、ネガティブポライトネスストラテジーとして機能し、距離を広げてしまうという可能性が推察される。

3.3. 英語の“Hello” 中国語の“你好”の使用制約

まず、英語の“Hello”であるが、相手との心理的な距離に関わらず非常に高い汎用性を持って使用することが可能のようである。

中国語の“你好”については、丁（2017）がその使用制約について言及している。ここでは、相互に相手を知っていると云えない場合（一方のみが知っている可能性がある場合）でも、“你好”は多用されること、親しい間柄では、“你好”は使用されにくいことを述べている。中国語“你好”には一定の使用制約があるものの、英語の“Hello”、中国語の“你好”は、日本語の「こんにちは」ほどの使用制約はない表現と位置づけることができそうである。

これまでの考察を図にまとめると以下のようになろう。

表 1 心理的な距離と挨拶語の使用

	非常に近	近（同僚等）	遠
こんにちは	×	○	×
你好	×	○	○
Hello	○	○	○

- ・非常に近：学生時代からの友人、職場の同期、幼馴染、等
- ・近：面識がある。同じ組織に所属、同じ地域コミュニティに所属、等
- ・遠：これまで面識がない

それぞれの言語で、「こんにちは」に相当する表現の使用制約が異なっていることがわかる。外国人日本語学習者にとって「こんにちは」の使用が難しいというのも、このような挨拶表現の使用場面の制約によるところが大きいように思われる。

4. 挨拶とポライトネス

4.1. 挨拶をポライトネスにどのように位置づけるか

挨拶をポライトネスという観点からどのように位置づけるべきかについて、ここで改めて考えてみたい。挨拶を語用論的にどのようにとらえるかについては、山岡（2008）、滝浦（2008）、丁（2017）で言及が見られる。

山岡（2008）では、発話行為論の観点から、{形成}の下位範疇とみなし、発話参加者が会話の成立を欲していることを語用論的な条件と規定している。そして、その目的は人間関係を維持・確認することとする。

滝浦（2008）は、挨拶を社会的な人間関係において、場面に応じて儀礼的に交わされる言葉や動作と位置づけている。

丁（2017）は、挨拶は FTA でもあるが、聴者のフェイスを配慮した行為でもありとし、水谷（1979）を引用しつつ、「こんにちは」は自分の仲間というよりはソトの人に対して使う挨拶であり、形式にこだわる言い方であるため、相手のネガティブフェイスへの配慮の度合いが比較的強いのではないかと述べている。

それぞれ、どのような目的で考察を進めたかも異なり、ポライトネスという観点からどのようにとらえたかを比較することも難しいように思われるが、本稿では、挨拶をポライトネスという観点から再考しつつ、上記の先行研究との関りについて触れていきたい。まず、「こんにちは」に関わらず、すべての挨拶表現の特徴として以下が挙げられるだろう。

- ① 今後人間関係を築く必要がない、未知の相手に対しては行わない
- ② 未知の相手に挨拶を行うのは、今後何らかの人間関係が発生する場合である。
- ③ 知己の間で挨拶を行うことは無標の行為であり、それを行わないとインポライトネスとなる。（喧嘩した相手と会った時に無視する等）
- ④ 知己の間で挨拶を行うことは無標であるが、そこで選択する挨拶表現によっては FTA を生じさせる可能性がある。

山岡の言う、人間関係を維持・確認するというのは、知己の間で挨拶を行わないとインポライトネスとなり、当然行うべき行為とみなされているということに関連する。滝浦の言う儀礼的に交わされる言葉や動作も、同様の点について述べたものであろう。丁は、挨拶は聴者のネガティブフェイスに配慮したネガティブポライトネスストラテジーであると主張しているが、挨拶が、知己の間柄において、お互いが同じグループに属しているという確認作業であること、それを行わないと相手の面子を潰し、インポライトネスとなることを考えれば、ポジティブポライトネスストラテジーと位置づけるのが妥当なのではないだろうか。ただし、ポライトネスストラテジーとして働く強さは、言語によって、また選択される挨拶表現によって異なり、ポライトネスストラテジーとは解釈しにくいものから、明らかにポライトネスストラテジーとして利用されるものまで、一定のグラデーションを持って存在しているという点には留意すべきであろう。また、そのポライトネスストラテジーも、ポジティブフェイスに関わるものだけでなく、ネガティブフェイスに関わるものも存在すると考えるべき事例も見られ（一定程度以上に親しい相手に「こんにちは」を使うとよそよそしいと感じられることなど）、詳細な検討が求められる。

なお、挨拶は B&L（1987）におけるポジティブポライトネスストラテジーの分類中のス

トラテジー1「聴者に気付き注意を向けよ」に含まれるとも考えられるが、B&L(1987)では、挨拶をポライトネスストラテジーの例として挙げていない。これは、英語における“Hello”が汎用性が高く、聴者のポジティブフェイスやネガティブフェイスへの影響が少ないということによるものかもしれない。

4.2. 「こんにちは」「Hello」「你好」とポライトネス

3.3節で観察した内容と重複する部分もあるが、「こんにちは」「Hello」「你好」のポライトネスストラテジーについて検討したい。西(2015)は、中国語の“你好”の使用について言及しているが、丁(2017)と類似した観察を行っている。

“你好!”(こんにちは)や“早上好”(おはようございます)、“晚安!”(おやすみなさい)などのいわゆる「定型表現」はいまだ外国臭の残る表現であり、形式的、正式な場面を除き、日常語としてほとんど用いられなかったが、最近では徐々に使用頻度が上がっており、特に“你好!”は見知らぬ人に声をかけるときなどに積極的に用いられるようになってきている。⁽²⁾

この考察によれば、“你好”は、現在では親しくない相手にも使用可能な表現となったと言える。英語の“Hello”について言及した先行研究は見当たらなかったが、英語母語話者の語感によれば、英語でも見知らぬ人に呼びかけるときも問題なく使用できるようである。

一方、日本語の「こんにちは」は一定程度親しい相手にしか使用できない。そのため、初対面の相手に使うと、相手との距離を詰めるという機能が働き、ポジティブポライトネスストラテジーとして機能する。一方、非常に親しい相手に使用すると、ややフォーマルな表現であるという側面の影響等によそよそしい感じを与えるなどし、ネガティブポライトネスストラテジーとして機能すると考えられる。

なお、英語の“Hello”や中国語の“你好”も、相手に気づき注意を向けるという働きは有する。これを当然行うべき無標の行為と見なしたり、弱いポジティブポライトネスストラテジーと考えた場合、英語の“Hello”や中国語の“你好”はポライトネスストラテジーを持たないか、或いは非常に弱いということになる。一方で、日本語で初対面の相手に「こんにちは」を用いた場合等は積極的に距離を詰めるという働きを有するポジティブポライトネスストラテジーを持つと考えることが妥当であるように思う。

表2 「こんにちは」「你好」「Hello」のポライトネスストラテジー

	相手に気づき注意を向ける	相手との距離を詰める
こんにちは	○	○
你好	○	×
Hello	○	×

5. 文章(私信)における「こんにちは」

5.1. 「こんにちは」とFTA

「こんにちは」は「今日はよいお天気ですね」等の省略形であると見るのが一般的な見

解であるが、形態論的に常体であることがその特徴である。例えば「おはようございます」は常体の「おはよう」と対立する敬体であるが、「こんにちは」にはそのような敬体が存在しない。ゆえに、相手との距離を詰めるというポジティブポライトネス戦略として機能する機会が多いということになる。「こんにちは」は挨拶表現として形式化しているが、実際には一定程度以上に近接化された相手にしか用いることができないことは、これまで見た通りである。なお、後に改めて述べるが、会社での挨拶に「おはようございます」が多用されるようになってきているという背景には、この「こんにちは」のポジティブポライトネス戦略としての側面が影響しているのではないかと考えている。

ここでは私信等の文章の中での「こんにちは」の使い方について考えたいが、会話と文章とが異なる点として、まず、私信としての書き言葉（手紙やメール）では、会話で常体を用いる相手に送る場合であっても、年賀状や暑中見舞い、旅先からの手紙等々で敬体を用いる場合も多いということを指摘しておきたい。同じ心理的な距離の相手であっても、書き言葉では話し言葉よりフォーマルなスタイルを選択しやすいということである。

この点から、文章に「こんにちは」を用いた場合、相手との距離を詰めるというポジティブポライトネス戦略が、会話と比較して相対的に強化されて機能するということになるのではないだろうか。学内で出会った際に「こんにちは」を使うことができる学生と教員という間柄であっても、手紙やフォーマルなメールに用いると、本来一定の距離を保って情報を伝えるべきところで距離を詰めすぎるという事態が発生し、なれなれしい、というような感情、ある種の FTA が生じるということになると考えられる。

5.2. 文章（私信）における“Hello”

次に英語での“Hello”がどのように使用されているかについても見ておきたい。以下は、HP で英文メールの書き方について説明している文章である。

(13) 英文メールの例文①「問い合わせメール」

東洋経済新聞社の HP に、英文メールの書き方について特集したものがあつた。ここでは、以下のような例文を挙げている。

Hello, I am Yoko Yamagata, the in charge of the overseas business division at NICC Inc in Tokyo, Japan.

We're interested in your products.

It would be great if you could send us your latest catalog.

Best regards,

Yoko Yamagata

60 日集中特訓！ビジネス英語術 第 2 回「東洋経済 ONLINE」

<https://toyokeizai.net/articles/-/74170>

また、この英文について、以下のような説明がなされている。

一方、とてもカジュアルな「See you」、「Take care」などはビジネスでは使わないようにした方がいいでしょう。また、結びの言葉の後には必ずカンマを入れましょう。

説明の中で、このことから、英語の“Hello”はさほどカジュアルという印象はない表現であることがわかる。英語母語話者に確認したところ、やはり普通に“Hello”を用いると

いうことであった。

(14) 英文メールの例②「学生が教師宛てのメール」

学生が教師にメールを送る際の書き方について説明している HP に以下のような記述があった。まず宛名を書き、次に自分の名前を名乗り、履修している授業名を述べるといったような内容である。それぞれに例文が示されているが、自分の名前を名乗る際、“Hello”を用いていることがわかる。

①宛名

Dear Professor Smith

Dear Mr. Smith

②自分の名前を名乗る

Hello. My name is 名前 (学籍番号) .

③何の授業を受けているのか

I am taking your ‘Basic English I’ class on Tuesday in the third period.

I am enrolled in your ‘Basic English I’ class on Friday in the third period.

大学の先生に英文メールを送るときの例文・定型文まとめ

<https://matome.naver.jp/odai/2141866645364647901>

以上の例から、英語の“Hello”は書き言葉においても非常に汎用性が高く、ややフォーマルな文章中であっても使用可能であることがわかる。この点からも、英語の“Hello”は日本語の「こんにちは」のように聴者のフェイスに働きかけるということが少なく、知己に対して認識したことを示す無標の定型表現として確立しているということが見て取れる。

6. 関連する現象

6.1. 「おはようございます」の勢力拡大

5.1 節で触れたが、近年、会社での挨拶では、時間に関わらず「おはようございます」を使用することが多いようである。この現象は、「おはようございます」が好んで使われるというよりも「こんにちは」が使いにくい表現であるために避けられ「おはようございます」の使用が増えているという見方をすることで、これまでの本稿の考察の援用で説明が可能となるように思う。

「おはようございます」は敬体であるため、「こんにちは」に見られるような距離を詰めるポジティブライトネスストラテジーを持たない。会社で、使用を誤るとなれなれしいという印象を持たれかねない「こんにちは」は使用しにくく、その代替表現としてよりフォーマルな「おはようございます」が用いられていると考えられる。なお、「おはようございます」は、フォーマルであるという点以外にも、「こんにちは」と比較するといくつかの特徴が見えてくる。例えば以下のようなものである。

①フォーマルな場でなくても、例えば学校の部活動などでの挨拶としては「こんにちは」

よりも「おはよう」が選択されやすい（時間の制約は存在する）。

②家族間で「こんにちは」は用いることができないが「おはよう（ございます）」は使用可能である。

これらのことから、「おはようございます」は「こんにちは」ほど使用可能な心的距離に細かな制約がなく、使いやすい表現であること、「こんにちは」を使用しない家族間での挨拶でも「おはよう」は使用可能であり、内輪の意識の強い集団内でも使用可能であることがわかる。本稿では紙面の関係で「おはようございます」についての言及は控えるが、日本語の挨拶表現におけるポライトネスストラテジーの在り方を考える上で、「こんにちは」と対をなす興味深い表現形式であると思う。

6.2. 「こんにちは」の勢力拡大

前節では、「おはようございます」の勢力拡大について触れたが、その一方で、「こんにちは」も使用範囲を広げている可能性がある。以下は名大会話コーパスに掲載されていた文章である。

全然違う話なんですけど、その言葉でね、今わたしがすぐ頭に来てるのは、あのほら、喫茶店がみんななくなってスターバックスになっちゃったでしょう。うんええうんそうだ。三鷹にまであるわよ。本当、スターバックスもどきになって、もっと。うんでね、そうなの、それでね、あの、行くとね、みんながなんかこう、お、お友達調で、あの一、いらっしゃいませって言わないでこんにちはって言うの。#うん#うん#うん#うん#あ、本当？#スターバックスそうなの？#そう、でね、それがスターバックスがそれを始めたら、その、ほかのね、日本のお店もみんなこんにちはになって。#へー#うん#うん#本当？#で、それがね、#ど、どこで、東京で？#東京で。

(名大会話コーパス)

これは、店舗の接客などで、「こんにちは」が多用されつつあったことを示している会話であるが、その後さらに使用範囲は広がり、すでに接客業では普通の表現として受け入れられている可能性がある。これは、「こんにちは」の持つ、ポジティブポライトネスストラテジーとして客との心理的な距離を詰める機能を用い、親近感を示そうとすることによるものと考えられるだろう。

7. まとめと今後の課題

本稿では以下の点を主張した。

まず、挨拶表現は、「相手に気付き注意を向ける」という機能を有するが、挨拶を行わないとFTAが生じるという点から、無標の行為と考えられ、ストラテジーとみなすかは慎重に判断する必要がある。その上で、日本語の「こんにちは」は通常の挨拶表現の持つ「相手に気付き注意を向ける」という機能以外に、話者と聴者の距離を詰めるという働きを持つことを示した。この点で、「こんにちは」はポジティブポライトネスストラテジーとして機能する場合があると言える。

一方、“Hello”や“你好”は、聴者との距離を詰めるという機能がない、もしくは弱いため、広く使用可能である。

話し言葉の「こんにちは」と書き言葉の「こんにちは」は同様のものであるが、常体であるという特徴から、同様の心理的な距離の相手に情報を伝える際には、書き言葉の方が

話し言葉よりフォーマルなスタイルを取りやすい。そのため、書き言葉においては「こんにちは」のポジティブポライトネスストラテジーがより強く機能する。よって、話し言葉で「こんにちは」を用いることができる相手に対しても、書き言葉では使用しにくいという状況が発生する。

以上のような「こんにちは」と比較して「おはよう（ございます）」は相手との距離を詰める機能がなく（もしくは弱く）、汎用性が高い。会社での挨拶などで「おはようございます」が「こんにちは」を駆逐している理由はこの点にあると考えられる。ある場面では「おはようございます」の使用が増大する傾向にあるが、一方で「こんにちは」もそのポジティブポライトネスストラテジーとしての働きによって、店舗の挨拶等で積極的に用いられつつある。

今回は、「こんにちは」がポライトネスストラテジーと言えるのかという点について、理論的な考察を行ったが、「こんにちは」が使用可能となる心理的距離は明確化できていない。近でも遠でもない中庸のレベルということは示したが、それを明確化するためには、アンケート調査等を用いた実証的な考察が必要であろう。

また、中国ではあまり親しくない教員と学内ですれ違う際でも、多くの学生は挨拶するが、日本では挨拶自体を行わないとの指摘が先行研究によって示されていた。自分を知らない可能性がある場合、中国語では「相手に気付いた」マーカーとして挨拶を行うことを優先するが、日本語では、見知らぬ相手に声をかけることによる、聴者のネガティブフェイスの侵害リスクを優先していると考えられる。このような言語行動の背後に、「こんにちは」の汎用性の低さが影響している可能性が想定されるが、それをポライトネスという観点から説明するのであれば、言語行動としての挨拶とポライトネスの関係をより広い視野で検討する必要があるだろう。これらの点については今後の課題としたい。

注

- (1) 山内智恵美（2017）「“你好”は「こんにちは」なのか：日中挨拶ことばの比較と分析」 pp. 98
- (2) 西香織（2015）「中国語教材における出会いと別れのあいさつ表現」 pp. 84

参考文献

- 施暉（2005）「「あいさつ」言語行動に関する日中比較研究—日本語のあいさつに対する中国人留学生の違和感について—」『広島国際研究』11 広島市立大学 pp. 245-263
- 滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
- 丁尚虎（2017）「大学生におけるあいさつ使用の日中対照—出会いの場面を中心に—」『国際文化研究』23 東北大学 pp. 65-79
- 西香織（2015）「中国語教材における出会いと別れのあいさつ表現」『北九州市立大学 国際論集』13 北九州市立大学 pp. 81-96
- 彭飛（1990）『外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する研究』和泉書院
- 牧原功（2016）「外国人日本語学習者の用いる積極的ポライトネス：メールの文章を例にして」『日本語コミュニケーション研究論集』5

水谷修（1979）『話しことばと日本人—日本語の生態—』創拓社
山内智恵美（2017）「“你好”は「こんにちは」なのか：日中挨拶ことばの比較と分析」『教職課程センター紀要』2 大東文化大学 pp. 97-104
山岡政紀（2008）『発話機能論』くろしお出版
Brown, P. & S. C. Levinson（1987）*Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. 田中典子監訳（2011）『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』東京：研究社

（牧原功、群馬大学、makihara@gunma-u.ac.jp）